

2016年12月21日

TBSテレビ
『オール芸人お笑い謝肉祭‘16秋』に関する
委員会の考え

放送倫理・番組向上機構 [BPO]
放送と青少年に関する委員会

BPO青少年委員会は、多くの視聴者意見が寄せられたTBSテレビ『オール芸人お笑い謝肉祭‘16秋』(2016年10月9日 日曜日 18時30分から21時54分放送)について、第185回委員会で審議入りを決め、TBSテレビに番組の演出意図などについて質問書を送り回答書の提出を求めるとともに、第186回委員会で制作担当者などを招いて意見交換を行いました。TBSテレビには、真摯に対応していただいたことに感謝します。

青少年委員会は、これらを踏まえて審議を行い、各放送局にも引き続きバラエティー番組について考えていただきたいと願っている論点が含まれることから、以下のとおり、「委員会の考え」として公表することとしました。

1 「表現上の配慮」について

番組のうち、「大声厳禁 サイレント風呂」と「心臓破りのぬるぬる坂クイズ」のコーナーについて、多数の視聴者からBPOに対して、表現が下品で低俗であることに対する嫌悪感や不快感、男性の性器に触れるかのような演出で安易に笑いをとろうとした行為への違和感、また、子どもに与える影響を危惧する批判的意見などが寄せられました。

「大声厳禁 サイレント風呂」は、熱海の温泉場で、男性芸人たちが大声禁止のルールのもと様々なハプニングに対して我慢するというゲームでしたが、このなかで、三助役に扮した男性が複数の男性芸人の股間に“ヒリヒリする薬”を塗るシーンがありました。あわせて、別室でモニターを見ている女性アナウンサーの反応が映し出されました。

「心臓破りのぬるぬる坂クイズ」は、熱海の海岸にローションを塗った大型の階段セットを用意し、芸人が転倒したりもつれあって滑り落ちたりしながら階段をよじ登って頂上を目指すというものでしたが、そのなかで、複数の男性芸人と女性芸人が下半身を露出し、また男性芸人1人が全裸で階段を昇り降りするシーンが放送されました。こちらも女性アナウンサーはじめ異性がいる前での演出でした。

番組を視聴した委員からは、これらの演出について、社会的受容の範囲を逸脱しているのではないか、性に対する扱いが不適切であるなどの意見があり、青少年委員会がバラエティー番組についてこれまでに公表してきた「委員会の考え」などが十分に理解されていないと考えざるを得ませんでした。

民間放送共通の自主的な倫理基準として制定された「日本民間放送連盟・放送基準」(放送基準)の第8章「表現上の配慮」(48)には「不快な感じを与えるような下品、卑わいな表現は避ける」と規定されています。また、今回の番組は、日曜日のゴールデンタイムに放送されていますが、放送基準の第3章「児童および青少年への配慮」(18)には「放送時

間帯に応じ、児童および青少年の視聴に十分、配慮する」と規定されています。番組制作に携わる人たちは、これらの放送基準の意味を再確認していただきたいと思います。

青少年委員会は、2014年4月4日に公表した「日本テレビ放送網『絶対に笑ってはいけない地球防衛軍24時!』に関する委員会の考え」でも述べているとおり、バラエティー番組には視聴者の心を解放し活力を与えるという働きがあるとともに、視聴者の喜怒哀楽や感受性を直接刺激し日常生活の価値志向にも影響を与えることから、作り手は常に社会の動きにアンテナを張りめぐらせ、視聴者の動向を見据える必要があると考えています。つまり、「表現の内容が視聴者に与える影響は時代の価値観や社会のあり方に規定される」ということです。

現代社会はジェンダーについての意識やセクシャルハラスメントに対する理解が深まり、とくに近年は性的少数者の社会的受容という性意識の変化が見られるようになりました。

テレビ局はこうした動向を鋭敏に感知する必要があり、特定の場面に嫌悪感を表し、また、子どもに悪影響を与えると懸念する視聴者に対しても謙虚に耳を傾けるべきではないかと考えます。

2 収録時の配慮について

今回の審議入りに当たって青少年委員会が最も懸念したのは、収録時の配慮が欠けていたのではないかとということでした。多くの視聴者から指摘があったように、「心臓破りのぬるぬる坂クイズ」は、公共の場所である熱海の海岸で収録され、放送には、一般の人々が見学する姿が映っていました。

TBSテレビからは、収録状況について、「セット前面の『撮影エリア』は海に面しており（海辺まで20メートル）、左右は、基本セットに加えて参加者のコースアウト防止のために1.5メートルほどの壁を設置し、周囲からは独立したスペースと考えており」「『撮影エリア内』は一般の方々の立ち入り規制をしておりました」との回答がありました。ハプニングとして男性芸人のズボンが脱げる程度の露出は、制作者も予見していなかったわけではないが、ロケ中に芸人が自ら服を脱ぐなどの行為は全く想定外であったとのことでした。

しかし、ゲームの特殊性や進んで笑いを取ろうとする芸人の行動がエスカレートする可能性が皆無ではないことを考えれば、撮影場所の選定やセットの独立性の確保の点で配慮に欠けていたことを指摘せざるをえません。

番組の放送内容だけでなく、特に公共の場での収録に関しては、コンプライアンスへの十分な自覚と、不適切なハプニングが起きる可能性を想定するなど、細心の注意をもって臨んでいただきたいと思います。

3 多角的な視点によるチェック

回答書によれば、TBSテレビは制作局の自社制作番組のコンプライアンスおよび考査を制作考査部が担当し、通常、コンプライアンスや放送倫理をチェックするマネジメントプロデューサー（MP）が配置されます。ところが、今回の番組は2人のベテランプロデューサーが制作に携わっていたことなどから、専任のMPが配置されず、このため、結果

として、制作当事者だけのチェックとなり、考査担当者による客観的な指摘や議論のないまま企画が進行し、放送されることとなったとのことです。

老若男女から外国人まで、多様な価値観を有する様々な人たちが視聴するテレビ・ラジオについては、可能な限り多くの人々に共感を得られる番組を作ることが求められます。TBSテレビにおいては、多元的かつ客観的な視点によるチェックを経て検討を重ねることの重要性を再確認するとともに、制作スケジュールの問題など、今回、局内のチェックシステムが働かなかった原因を探り、課題を克服するための仕組み作りを再考していただきたいと思います。

4 放送局の対応について

TBSテレビは青少年委員会に対する回答書のなかで、「バラエティ番組における下ネタの大前提は、社会に受容される範囲を越えて社会通念から逸脱すれば、視聴者に不快感を与え」とし、「社会に受容される範囲」を線引きするのは難しいものの、問題になった2つのシーンは、「社会に理解される範囲を逸脱し、多くの視聴者に受容されない内容であったと反省せざるをえません」としています。

そこでこのたび直接寄せられた批判などを受けて、TBSテレビは制作局内でこれまでに青少年委員会が公表した「委員会の考え」「委員長コメント」を配布して勉強会を開き、意見交換を行いました。また、社内横断的な組織である放送倫理小委員会でも議論と検討を進めているほか、今後、全社的な議論の場である放送倫理委員会や外部の有識者が委員をつとめる「放送と人権」特別委員会でも取り上げていく予定とのことです。

TBSテレビには、青少年委員会に対する回答書の提出や意見交換においても、問題の所在を直截に捉えて、真摯に対応していただきました。今後もより良い番組作りのために更に議論が深まることを願います。

5 終わりに

青少年委員会は、テレビ・ラジオの使命である公共性について、これまで度々意見を述べてきました。今回の問題を受けて、放送局には、公共の電波を預かるものとして、また、国民の教養形成の最重要メディアとして、“公共善”の実現への責任を自覚していただきたいことを再度お伝えしたいと思います。放送局がこの自覚を忘れ、安易な番組制作に陥れば、2015年12月9日に公表した「テレビ東京『ざっくりハイタッチ』赤ちゃん育児教室企画に関する委員会の考え」で述べているように「権力的な統制を求める世論を高める可能性があり、結果的に制作者が望まない事態になる恐れ」もあります。そして、私たちは、これは表現のみならず収録を含む番組制作過程全般に当てはまると考えています。

視聴者に豊かな笑いを提供することは、上品と下品の境界上で、時として表現の限界に挑戦するような困難な努力が求められることではありますが、多様な価値観が広まっている現代社会において、自己模倣や安易な演出に流されることなく、視聴者が心を解放して明日への活力につながる爽やかな笑いに包まれるよう、より神経を研ぎ澄まして、真にチャレンジングなバラエティー番組を作ってくださいと期待します。

以上